

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	大坪 健太
2. 審査委員	主査：連大教授（岐阜大学） 春日 晃章 副主査：連大准教授（岐阜大学） 上田 真也 委員：連大教授（岐阜大学） 大藪 千穂 委員：連大教授（滋賀大学） 大平 雅子 委員：連大教授（兵庫教育大学） 小田 俊明
3. 論文題目	文武両道な子どもを育むための家庭環境モデルの解明
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻生活・健康系教育連合講座大坪健太から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和5年2月9日（土） 18時00分～18時30分 場 所：オンライン会議</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>子どもの体力低下問題は未だ改善には至っておらず、子どもの体力向上を図るうえで、学力をはじめとした諸能力の発達を含めた包括的な取り組みや、体力および学力のどちらもがバランスよく高い文武両道な子どもを育むという側面からの取り組みが有効となる可能性がある。</p> <p>こうした子どもの諸能力を育むうえで家庭の果たす役割は非常に大きい。家庭における初期投資の差が子どもの能力形成と成人後の職業生活に大きな格差・不平等をもたらすことや、子ども期の家庭環境要因が成人期の能力形成に有意な影響力を持つことが報告されている。大きく分けて経済的資本と文化的資本の2つで構成される家庭環境要因であるが、特に、子どもの学力との関係性に関して、社会学的研究や経済学的研究により知見が蓄積されている。一方、体力に関しては、子どもの体力に対する家庭環境の影響要因についての研究は少なく、経済的要因および文化的要因を含めた包括的な検討はなされていない現状にある。加えて、これまでは体力と学力が区別して検討されることがほとんどであり、同一の対象者に対してこれらの関係性を検討した研究報告は少ない。そのため、体力と学力それぞれに対する影響の共通点や相違点については明らかとなっていない。</p> <p>以上より、本研究の目的は、文武両道な子どもを育むための家庭環境モデルを明らかにすることであった。</p> <p>本研究では、第2章の文献研究を通して、第3章において解決すべき問題を設定し、この問題に即して仮説を立てた。次いで、第4章において仮説検証のため対象者、研究方法、研究手順等を設定し、それに基づいて仮説検証に適切な分析方法を選定した。第5章、第6章および第7章の3つの章においては設定した3つの研究課題について検討した。なお、それぞれの研究課題における検討事項は次の通りである。</p> <p>研究課題Ⅰでは体力と学力との関係についての多角的分析を実施することによりその関係性を検討した。加えて、肥満度の違いによる学力差を検討し、体格と学力との関係性を検討した。</p> <p>研究課題Ⅱでは、体力および学力の高低を組み合わせることでその集団的特徴を把握し、生活習慣の特性について検討した。</p> <p>研究課題Ⅲでは、体力および学力と家庭環境との複合的関連について、体力と学力それぞれに対</p>

して影響を及ぼす家庭環境の要因や、体力と学力を包括的に捉えた際の家庭環境との複合的関連について、その相互関連を統制したうえで検討した。

本研究で定義した用語、対象者、測定方法の限界の下で、最終的に以下の結論を得た。

研究課題Ⅰでは、体力と学力の関係についての多角的検証により、体力と学力との関係について、有意な相関関係が認められるものの、その程度は低く、一次線形モデルのみで評価することには注意が必要であるが、体力の低い集団における学力テストの低正答数者の割合が高く、他の群と比較して平均正答数は有意に低く、正答数のバラツキが大きいことが明らかとなった。体格との関係について、肥満の子どもの学力水準が低く、バラツキも大きいことが示された。

研究課題Ⅱでは、研究課題Ⅰにおいて明らかにした体力と学力の関係をふまえて、体力と学力を組み合わせで区分した群の各習慣特性を検討した。運動習慣、学習習慣および基本的習慣の結果から、運動習慣については体力の高低が、学習習慣の量的側面では学力の高低が、学習習慣の質的側面および基本的生活習慣に関しては体力および学力の高低がそれぞれ関連していることが示唆された。とりわけ、体力および学力のどちらもが低い低体力・低学力群における各習慣の顕著な乱れが示され、低体力・低学力群において朝食欠食率が高く、運動や家庭学習を全くしない割合が高く、睡眠時間は過度に短いあるいは長い両端の割合が高かった。

研究課題Ⅲでは、体力および学力と家庭環境との複合的関連について、子どもの体力向上を図るうえで特に重要視するべき要因を探索した。その結果、子どもとのスポーツに関する会話頻度および父親運動有能感の高さ、社会関係資本の充実が体力の高さと関連していた。学力との関連については、父親および母親の学歴の高さ、短大・大学までの進学期待の高さおよび親子での運動遊びの必要意識の低さの4項目において有意な関連が示された。体力および学力を包括的に捉えた検討においては、両親の学歴の高さ、父親の運動有能感の高さおよび親子でのスポーツに関する会話頻度の高さが体力および学力の発達と有意な関連が認められた。

## 2. 審査経過

### (1) 独創性と発展性

本論文の独創性は、大きく2つある。1つは、教育機関ごとに実施された体力および学力の測定データと保護者を対象としたアンケート調査の回答結果を関連づけて分析する点である。もう1つは、体力・学力の能力形成・向上に対する家庭環境の影響度についてのきめ細かい分析を通して、文武両道な(体力も学力もバランスよく高い)子どもを育むために重要となる家庭環境要因の解明を試みた点である。

また、本研究はこれまで区別して分析がなされてきた体力と学力という2つの能力をまとめた能力として捉え、その能力形成と家庭環境との関係性を検討したが、今後は縦断的な調査を継続することにより、その因果関係の改名に大いに貢献することが見込まれる。加えて、格差問題に対する施策を講じる際のエビデンスとなり得ることから、その発展性についても期待される。

### (2) 学校教育の実践への貢献

本論文の学校教育の実践への貢献として、これまで成し得なかった子どもの体力および学力に対する家庭環境が及ぼす影響度の定量的に評価し、体力と学力をどちらも高めていくために特に重要となるポイントを科学的根拠に基づいて提示したことが挙げられる。誰にでも当てはまる唯一の答えというものが存在しない子育て・教育において、子ども一人一人にとっての最適解を見つけ出すうえで、本研究の知見が極めて有効となる。

## 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は大坪健太の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。